

「私は未来のつくりて ～ 心ときめき つくるよろこび つながる造形教育 ～ 」

1 研究主題「私は未来のつくりて」について

社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0時代」の到来や感染症拡大など先行き不透明な「予測困難な時代」の中で、今後の社会を自らの力で切り拓き、たくましく生き抜いていく人材を育てることが重要である。そのためには、自分のよさや可能性を認識するとともに、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手として育つよう、子供たちに学校・家庭・地域が連携した環境の中で、様々な経験を積み重ねていくことが必要である。その過程で、変化に対して受け身ではなく、探究心をもって社会や人生、生活を感性や想像力を働かせてより豊かなものにするのできる人材の育成が求められる。

これからの教育の中で、幼稚園「表現」・小学校「図画工作科」・中学校「美術科」・高等学校「芸術科（美術、工芸）」（以下、まとめて「造形教育」と述べる）の果たす役割はとて大きく、STEAM教育^{*1}の中心となる教育分野として注目されている。造形教育は、材料や題材、鑑賞するものとして子供たちが手にするものは同じであっても、表現の主題（テーマ）や、作品などから感じ取るよさや美しさは一人一人の子供がを見つけ、作品や言葉として出てくる「こたえ」は一人一人異なることに意味がある。そして、形や色などを通して、一人一人が自分の感じたことや考えたことをイメージとしてまとめ、自分の感性を通して自由に表現・鑑賞し、自分としての意味や価値をつくり出すことをめざすものである。子供たちにとっては、人と同じであることを求められるのではなく、自分は人と異なるということが主張でき、自分らしさを表現・追求し創造する活動ができる。造形教育には今後の社会の創造的な創り手となるために必要な要素がたくさん詰まっている。まさにこれからの時代の核となるべきものではなからうか。「未来のつくりて」を造形教育の立場からどのように育てていくか、具体的に研究を進めていく必要がある。

2 副題「心ときめき つくるよろこび つながる造形教育」について

「未来のつくりて」を育てていくために必要なことを、次のように整理し、研究を進める。

①「心ときめき」について

私たちは日常生活の中で、様々な気持ちや想いをもちながら生活している。それは、自分自身の感覚、感じたことや思いついたこと、考えたこと、見たことや聞いたこと、伝え合ったこと、夢、想像や心の世界など様々な方法で認知したことを基として湧き上がってくるものである。「ひと・もの・こと」とのつながりの中で、自身の感覚に合致したときに、私たちの心はときめく。さらに、そのつながりの中で大きな刺激を得たり、自分自身の中で大きな発見をしたりしたときに、「感動」となって私たちの心は揺さぶられる。

私たちは、心ときめいたことや感動したことを誰かに伝えたい、聞いてもらいたい、知ってもらいたいと思っている。そのことが表現の根本である。形や色などを通して、表したいことをどのように子供たちから表出させるか、表出するために発想し構想を練

ったり、作品などに対する見方や感じ方を深めたりする経験が「未来のつくりて」に育つエネルギーになる。

②「つくるよろこび」について

発想し構想したことを基に自分の表現を具体化するためには、技能が必要となる。今回の学習指導要領改訂では、描いたりつくったりするための技能という定義ではなく、「発想や構想をしたことを基に表現する活動を通しての技能」となった。「技能」は、豊かな思いに基づいた「思考力、判断力、表現力等」とともに働いて発揮される。

与えられた材料や題材を通して、自分自身の表したいことが明確となってイメージをもったり主題を考えたりして、そのことを表現するために材料や技法を選択し、表現する流れの中で「技能」は発揮される。また、「技能」を働かせる中から、新たな発想や構想が生まれることもある。そんな技能が発揮され、自分の意図をよりよく表現することができたときに、子供たちは「つくるよろこび」を感じる。子供たちが考える主題がそれぞれ異なるように、子供たちが身に付けている技能もそれぞれ異なる。子供たちなりの線の描き方、色の塗り方、材料の使い方などや子供たちそれぞれがもつ感覚の違いと同様に、技能にも違いがあり、それらのことが作品に表れてくる。これが一人一人の表現の違いとなる。人と違うことが堂々とでき、異なることをすることに値打ちがあり、そのことを通して自分なりの意味や価値がつけられていく。自分が納得できる作品づくりに取り組んでいるときに「よろこび」を感じるのである。

子供たちにただ上手な絵や作品をつくらせるだけでは、真の「未来のつくりて」の育成にはつながらない。多くの作品が似てしまうような子供たちにとって適切でない指導では、「思考力、判断力、表現力等」の育成にはつながらない。発想や構想の段階において子供たちが自分で考えず、ましてや自分で決めようとせず、教師の言うとおりにつくっていればいい作品となる授業にしてはならない。ここにおいて、子供たちは「表現するよろこび」言い換えれば「つくるよろこび」を感じることはないだろう。

③「つながる造形教育」について

造形教育を通して子供たちに様々なつながりをつくっていくことが造形教育に関わる教師の役割である。題材や表現の材料と方法のつながり、表現活動と鑑賞活動のつながり、子供たち同士・教師・地域の人々や作品を鑑賞する人々とのつながり、作品展示・イベント等への取組とのつながりなどにおいて、子供たちの表現は、自分の中だけの表現から「ひと・もの・こと」へとつながり、広がっていく。

一方、「つながり」をつくっていく前提として、根本的に、造形活動は自分の思いや感じたこと、考えたことを伝え、発信するためのコミュニケーションの方法の一つであり、形や色などを通した他人の発信を受け取る力を子供たちに付けていくことも重要であることは言うまでもない。

前述のとおり、子供たちが自分の納得できる作品づくりに取り組むことができ、「よろこび」を感じることができれば、子供たちの学びは「深い学び」となり、学んだことが自分の生き方の獲得につながっていくだろう。

そして、それは、幼・小・中・高それぞれの園・校種の継続的な充実した取組のつな

がりの中で、それぞれの発達段階に応じてアップデート（更新）されていく。そして、教科横断的な他教科とのつながりの中で、造形教育はその存在価値を示していくことになるだろう。

3 研究事項～造形教育の今後の課題～

造形教育のこれからの課題として、表現と鑑賞を相互に関連させた一体的な授業展開と、美術の働きや美術文化についての実感的な理解を深め、造形活動を通して生活や社会と豊かに関わる態度を育成することがあげられる。その課題となる部分を改善していくために、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善、指導と評価の一体化、GIGAスクール構想の実現による一人一台端末の活用、教科等間のつながりを意識した教育課程の編成・実施（カリキュラム・マネジメント）が徐々に進んできている。これらのことを通して、子供たちが造形教育を通して身に付けたことが、彼らの将来の生活、すなわち「未来のつくりて」としての生き方に実感を伴いながら役立つものにしていくことが重要である。

今回の四国造形教育研究大会徳島大会では、これらのことも視野に入れ、研究を進めていく。

*1 STEAM教育

- 教育再生実行会議第11次提言において、幅広い分野で新しい価値を提供できる人材を養成することができるよう、新学習指導要領において充実されたプログラミングやデータサイエンスに関する教育、統計教育に加え、STEAM教育の推進が提言された。高等学校改革を取り上げた本提言において、STEAM教育は「各教科での学習を実社会での問題発見・解決にいかしていくための教科横断的な教育」とされている。
- STEAM教育については、国際的に見ても、各国で定義が様々であり、STEM (Science, Technology, Engineering, Mathematics) に加わったAの範囲をデザインや感性などと狭く捉えるものや、芸術、文化、生活、経済、法律、政治、倫理等を含めた広い範囲で定義するものもある。

STEAMの各分野が複雑に関係する現代社会に生きる市民として必要となる資質・能力の育成を志向するSTEAM教育の側面に着目し、STEAMのAの範囲を芸術、文化のみならず、生活、経済、法律、政治、倫理等を含めた広い範囲 (Liberal Arts) で定義し、推進することが重要である。
- 小学校、中学校においても、児童生徒の学習の状況によっては教科等横断的な学習の中でSTEAM教育に取り組むことも考えられる。その際、発達の段階に応じて、児童生徒の興味・関心等を生かし、教師が一人一人に応じた学習活動を課すことで、児童生徒自身が主体的に学習テーマや探究方法を設定することが重要である。

中央教育審議会答申（令和3年1月26日）より抜粋